

# 「おやじは反面教師」

団塊世代を親に持つ世代の多くは、不況のまっただ中で社会に出た。未曾有の就職難は、職業観に大きな変化をもたらした。サラリーマンとして生きた父の背中さえ、「反面教師」と映ることがある。親の世代と違う生き方を模索し、人生を切り開こうと駆けだした三十代の若者たち。団塊ジュニア世代の家族の物語を追った。



## 団塊ジュニアの見た背中 ①

雄大な阿蘇山中岳を眼前に望み、南側の背後には外輪山が迫る。熊本県南阿蘇村両併の築百二十年の古民家に、ドイツの大学院で環境計画を学んで帰国した大津耕太さん(31)、愛梨さん(32)の夫婦が住みついていたのは、四年前の春。カルデラに広がる水田では、間もなく田植えが始まる。

△ △

南阿蘇は、耕太さんの父、耕志さん(58)が二十歳まで暮らした郷里。家の裏を流れる両併川は、護岸工事が行われた約二十年前までは、滝つぼもある清流だった。幼いころに遊んだ夏の記憶は今も鮮やか。この土地

# 父の実家で農業継ぐ

意した理由の一つだ。熊本県立済々黈高校を卒業後、慶応大環境情報学部に進学。就職活動もしたが、「超氷河期」といわれた就職難の時代。「終身雇用」という概念は頭の中になく、大学を出て企業に勤めるという選択肢さえ、共有できなかった世代の中にいた。「自分は何をして生きていくべきか」と自問す

る日々。大学時代、故郷熊本を初めて外側から眺め、卒業後、環境コンサルタント会社での一年間のアルバイト後に留学したドイツでも海外から日本を見つめ、考えた。大学でもと学んだ愛梨さんと結婚した二週間後、二人でドイツに旅立ち、三年半の間、農村の暮らしをつぶさに見た。

耕志さんは長男としてをしていただろうし、息子夫婦が熊本に戻ってきて喜んでくれるはず」と耕太さんは言うが、実は耕志さんには就農を相談したことも、反応を直接確かめたこともない。「おやじは反面教師」と口にするほどの溝が、二人の間に今も横たわる。

△ △

「いつも仕事ばかりで、しかも雇われの身。ほとんど家にいないし、いてもテレビで野球ばかり」。不器用に見える父の生き方が歯がゆかった。だが、農業を継がなかった負い目からか、実家に距離を置いておこうと見える父の気持ちも最近、少し分かる気がする。

「農業をやるとは思っていないかったが、喜んでいて。息子夫婦が思うように生きられるなら、それが一番」。息子の言葉を伝え聞き、父、耕志さんは語る。父と子のキャッチボール。次に球を投



大津さんは、親に相談することなく農業への道を選んだ(熊本県南阿蘇村)

本と同様だが、休耕地で菜種を栽培、わらを発酵させたバイオ燃料まで作る農家は、「エネルギーも生産している」という誇りに満ちていた。父の実家は代々続く農家。後を継いだ叔父には子どもがいなかった。後継者として就農できれば、ゼロからのスタートではない分、ハードルは低い。叔父に相談すると「好きにしたらいい」と返事をもらい、住む家の世話などもしてくれた。

「おやじも実家の心配。懸命に働く父の背中を

ずるのよ……。



# サラリーマン

2007

## 団塊ジュニアの見た背中 ③

東京育ちの天津愛梨さん(32)が熊本県南阿蘇村で就農してから、四年がたった。夫の耕太さん(31)の叔父の農園で働き、近所付き合いの中で阿蘇弁も話せるようになった。今では「耕太が婿に來たんじゃないのか」と言われるほど、農村の暮らしに慣れてきた。

昨年一月に双子の男児を出産、母親になった。小学校の春休み中は、近所の女の子が遊びに來て、託児所さながらのにぎやかさ。少女たちが子

# 会社人間の苦勞を思う

る。慌ただしい毎日だが「楽しくて仕方がない」と笑顔がこぼれる。

地域計画や環境調査を学んだ愛梨さんらは、二〇〇二年秋まで三年半、ドイツの大学院に留学。

大学教授が自分で麦を作って粉をひき、パンを焼いて暮らす姿に「自分たちも田畑を耕しながら、農村の振興を考えよう」と思った。その早道は耕太さんの叔父を頼り、阿

とも「行くなら早い方がいい」と話した。特定非営利活動法人(NPO法人)「九州バ

イオマスフォーラム」の理事長を務め、環境問題にも力を注ぐ愛梨さん。

現在、阿蘇の草原のススキを蒸し焼きにして

サラリーマンだった父の浩二さん(64)は「道を切り開ける娘がうらやましい」と語る。システムエンジニアとして企業を渡り歩き、ヘッドハン

テイングもリストラムも経験した。生き方は器用でなかったが、「それでも会社に属していないと不安だった」という。

蘇に行くことだった。

両親は「十年ぐらい東京で働き、人脈を広げた方がいい」と引き留めた

「特に大きな影響を受けた」と振り返るのは、四十年前からバリアフリー住宅に取り組む建築家

「おれの人生は何だったんだろうな」。数年前、一緒にお酒を飲みながら、実父のこぼした言葉が、愛梨さんの耳に残る。「お

が、決心は固かった。大学を出て農業という職業に就く。そんな選択肢を自分たちが示せば、若い世代の考え方も、農業も少しずつ変わっていく

の母、吉田紗栄子さん(64)の生き方だ。「人間にとって住みやすい環境を」というテーマは、

息子ではなく、娘だからなのかもしれない。



双子の息子との時間が楽しい